

## 宮沢賢治 「どんぐりと山猫」

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨もがさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまって、うちじゅうとんだりはねたりしました。

ね床にもぐつてからも、山猫のいやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。おもてにでてみると、まわりの山は、みんなたっただけきたばかりのようじうるるもりあがつて、まつ青なそらのしたにあらんでいました。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼって行きました。

すきとおった風がざあつと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい。」とききました。栗の木はちよつとしずかになつて、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。

「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつといつてみよう。栗の木ありがとう。」

栗の木はだまつてまた実をばらばらとおとしました。

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝でした。笛ふきの滝というのは、まつ白な岩の崖のなかほどに、小さな穴があいていて、そこから水が笛のように鳴つて飛び出し、すぐ滝になつて、ごうごう谷におちているのをいうのでした。

一郎は滝に向いて叫びました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい。」

滝がぴーぴー答えました。

「やまねこは、さつき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ。」

「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、まあも少し行ってみよう。ふえふき、ありがとう。」

滝はまたもつのように笛を吹きつづけました。

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさん白いきのこが、どつてどつてどつてどつてこと、変な楽隊をやっていました。

一郎はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかつたかい。」

とききました。するときのこは

「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」とこたえま  
した。一郎は首をひねりました。

「みなみならあつちの山のなかだ。おかしいな。まあすこし行ってみよう。きの  
こ、ありがとう。」

きのこはみんないそがしそうに、どつてこどつてこと、あのへんな楽隊をつづけ  
ました。

一郎はまたすこし行きました。すると一本のくるみの木の梢を、栗鼠がぴよん  
ととんでいました。一郎はすぐ手まねぎしてそれをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通らなかつたかい。」とたずねました。するとり  
すは、木の上から、額に手をかざして、「一郎を見ながらこたえました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに馬車でみなみの方へ飛んで行きましたよ。」  
「みなみへ行つたなんて、二とこでそんなことを言うのはおかしいなあ。けれども  
まあすこし行ってみよう。りす、ありがとう。」りすはもう居ませんでした。た  
だくるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちらつとひかっただけでし  
た。

一郎がすこし行きましたら、谷川にそつたみちは、もう細くなって消えてしま  
いました。そして谷川の南の、まつ黒な樫の木、森の方へ、あたらしいちいさなみ  
ちがついていました。一郎はそのみちをのぼって行きました。樫の枝はまっくろに  
重なりあつて、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎  
が顔をまっかにして、汗をほとほとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわか

にはっと明るくなって、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリーブいろのかやの木のもりでかこまれてありました。

その草地のまん中に、せいひの低いおかしな形の男が、膝を曲げて手に革鞭をもつて、だまってこつちをみていたのです。

一郎はだんだんそばへ行つて、びっくりして立ちどまってしまいました。その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のような半纏のようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがつて山羊のよう、ことにそのあしきとききたら、ごはんをもるへらのかたちだったのです。一郎は気味が悪かったので、なるべく落ちついてたずねました。

「あなたは山猫をしりませんか。」

するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまげてにやつとわらつて言いしました。

「山ねこさまはいますぐに、ここに戻つてお出やるよ。おまえは一郎さんだな。」

一郎はぎよつとして、「あしうしろにさがつて、

「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知ってますか。」と言いました。

するとその奇体な男はいよいよにやにやしてしまいました。

「そんたら、はがき見だへ。」

「見ました。それで来たんです。」

「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だへ。」と男は下をむいてかなしそうに言いしました。「一郎はきのどくになつて、

「さあ、なかなか、ぶんしょうがうまいようでしたよ。」

と言いますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまっ赤になり、きもののえりをひろげて、風をからだに入れながら、

「あの字もなかなかうまいか。」とききました。一郎は、おもわず笑いだしながら、へんじしました。

「うまいですね。五年生だってあのくらいには書けないでしょう。」

すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生っていうのは、尋常五年生だべ。」その声が、あんまり力なくあわれに聞こえましたので、一郎はあわてて言いました。

「いいえ、大学の五年生ですよ。」

すると、男はまたよろこんで、まるで、顔じゅう口のようにして、にたにたにたにた笑って叫びました。

「あのはがきはわしが書いたのだよ。」

一郎はおかしいのをこらえて、

「ぜんたいあなたはなにですか。」とたずねますと、男は急にまじめになって、

「わしは山ねこさまの馬車別当だよ。」と言いました。

そのとき、風がどうと吹いてきて、草はいちめん波だち、別当は、急にていねいなおじぎをしました。

一郎はおかしいとおもって、ふりかえって見ますと、そこに山猫が、黄いろな陣羽織のようなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました。やっばり山猫の耳は、立って尖っているなど、一郎がおもいましたら、山ねこはびよこつ

とおじぎをしました。「一郎もていねいに挨拶しました。」

「いや、こんにちは、きのうははがきをありがとう。」

山猫はひげをぴんとひっぱって、腹をつき出して言いました。

「こんにちは、よくいらっしやいました。じつはおとといから、めんどうなあらそいがおこって、ちよっと裁判にこまりましたので、あなたのお考えを、うかがいたいとおもいましたのです。まあ、ゆっくり、おやすみください。じき、どんぐりどもがまいりましょう。どうもまい年、この裁判でくるしみます。」山ねこは、ふところから、巻煙草の箱を出して、じぶんが一本くわえ、

「いかがですか。」と一郎に出しました。「一郎はびっくりして、

「いいえ。」と言いましたら、山ねこはおおようにわらって、

「ふふん、まだお若いから、」と言いながら、マッチをしゅつと擦って、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐きました。山ねこの馬車別当は、気を付けの姿勢で、しゃんと立っていました。いかにも、たばこのほしいのをむりにこらえているらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。びっくりして屈んで見ますと、草のなかに、あっちにもこっちにも、黄金いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのです。よくみると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないようでした。わあわあわあわあ、みんななにか云っているのです。

「あ、来たな。蟻のようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当りがいいから、そここの草を刈れ。」やまねこは巻たばこを投げすて

て、大いそぎで馬車別当にいつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰から大きな鎌をとりだして、ぎっくぎっくと、やまねこの前のとこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかつて、飛び出して、わあわあわあ言いしました。

馬車別当が、こんどは鈴をがらんがらんと振りましました。音はかやの森に、がらんがらんがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこしはずかになりました。見ると山ねこは、もういつか、黒い長い縺子の服を着て、勿体らしく、どんぐりどもの前にすわっていました。まるで奈良のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のようだと一郎はおもいました。別当がこんどは、革鞭を二三べん、ひゅうぱちつ、ひゅう、ぱちつと鳴らしました。

空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした。

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかなおりをしたらどうだ。」山ねこが、すこし心配そうに、それでもむりに威張つて言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いえいえ、だめです、なんといったって頭のとがつてるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがつています。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」  
「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ。」

「そうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのうも判事さんがおっしゃったじゃないか。」

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押しっこのえらいひとだよ。押しっこのしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがや言っつて、なにがなんだか、まるで蜂の巣をつついたようで、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとかころえる。しずまれ、しずまれ。」

別当がむちをひゆうぱちつとならしましたのでどんぐりどもは、やつとしずまりました。やまねこは、ぴんとひげをひねって言いました。

「裁判ももうきようで三日目だぞ。いい加減に仲なおりしたらどうだ。」すると、もうどんぐりどもが、くちぐちに云いました。

「いいえ、だめです。なんといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」

「そうでないよ。大きなことだよ。」がやがやがや、もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫が叫びました。

「だまれ、やかましい。ここをなんとか心得る。しずまれしずまれ。」

別当が、むちをひゆうぱちつと鳴らしました。山猫がひげをぴんとひねって言いました。

「裁判ももうきようで三日目だぞ。いい加減になかなおりをしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。あたまのとがったものが……。」がやがやがや。

山ねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとかころえる。しずまれ、しずまれ。」

別当が、むちをひゆうばちつと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。山猫が一郎にそつと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」

一郎はわらってこたえました。

「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できいたんです。」

山猫はなるほどというふうにならずいて、それからいかにも気取って、繻子のきものの胸を開いて、黄いろの陣羽織をちよつと出してどんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなっていないくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」

どんぐりは、しいんとしてしまいました。それはそれはしいんとして、堅まってしまいました。

そこで山猫は、黒い繻子の服をぬいで、額の汗をぬぐいながら、一郎の手をとりました。別当も大よろこびで、五六ぺん、鞭をひゆうばちつ、ひゆうばちつ、ひゆうひゆうばちつと鳴らしました。やまねこが言いました。

「どうもありがとうございます。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名誉判事になってください。これからも、葉書が行ったら、どうか来てくださいませんか。そのたびにお

礼はいたします。」

「承知しました。お礼なんかありませんよ。」

「いいえ、お礼はどうかとつてください。わたしのじんかくにかかりますから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。」

一郎が「ええ、かまいません。」と申しますと、やまねこはまだなにか言いたそうに、しばらくひげをひねって、眼をばちばちさせていましたが、とうとう決心したらしく言い出しました。

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明日出頭すべしと書いてどうぞでしょう。」

一郎はわらって言いました。

「さあ、なんだか変ですね。そいっだけはやめた方がいいでしょう。」

山猫は、どうも言いようがまづかった、いかにも残念だというふうに、しばらくひげをひねったまま、下を向いていましたが、やっとあきらめて言いました。

「それでは、文句はそのままのとおりにしましょう。そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金のどんぐり一升と、塩鯉のあたまと、どっちをおすきですか。」

「黄金のどんぐりがすきです。」

山猫は、鯉の頭でなくて、まあよかったというように、口早に馬車別当に云いました。

「どんぐりを一升早くもつてこい。一升にたりなかつたら、めっきのどんぐりもまぜてこい。はやく。」

別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかつて叫びました。

「ちようど一升あります。」

山ねこの陣羽織が風にばたばた鳴りました。そこで山ねこは、大きく延びあがって、めをつぶって、半分あくびをしながら言いました。

「よし、はやく馬車のしたくをしろ。」白い大きなきのでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。そしてなんだかねずみいろの、おかしな形の馬がついていきます。

「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」山猫が言いました。二人は馬車にのり別当は、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。

ひゆう、ぱちっ。

馬車は草地をはなれました。木や藪がけむりのようにぐらぐらゆれました。一郎は黄金のどんぐりを見、やまねこはとぼけたかおつきで、遠くをみていました。

馬車が進むにしたがつて、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車がとまったときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変わっていました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持って立っていました。

それからあと、山ねこ拝というはがきは、もうきませんでした。やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えはよかったと、一郎はときどき思うのです。